

婦人科検査編

放射線科 馬場健吉

はじめに：

婦人科疾患には主に子宮と卵巣の病変があります。子宮の病変には筋腫や内膜症、がんなどがあり、卵巣には内膜症や生理周期の影響で出現する嚢胞、腫瘍（良性と悪性がある）があります。

子宮にできるがんには子宮頸がんと子宮体がんがあり、子宮頸がんは子宮の膣に近い部分（子宮頸部）に発生し、子宮体がんは子宮体部に発症します。症状は、生理周期と関係ない出血（不正出血）ですが、がんが上皮にとどまっているときは、無症状のことも多いようです。子宮頸がんの原因はヒトパピローマウイルスの感染によるもので、性行為の対象者が多い人に感染が多いことが分かっています。子宮体がんの原因には女性ホルモン（エストロゲン）が関係しています。妊娠・出産の経験がない人はリスクが高いといわれます。また、肥満や高コレステロール血症も危険因子になっています。日本では子宮頸がんが多いですが、近年子宮体がんが増加してきています。

卵巣がんは高齢出産、妊娠・出産の経験がない、排卵誘発剤による不妊治療を受けた、乳がんや子宮体がんの既往などが危険因子になっています。

今回は婦人科の病気の診断法や病気の広がり調べる画像診断について説明します。

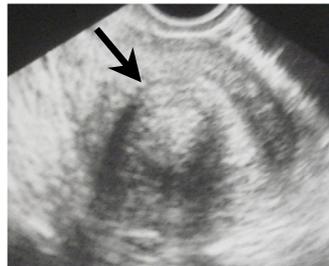
細胞診検査：

がん検診でも行われ、子宮頸がんや子宮がんの診断のため、一部の細胞を採取する方法です。

エコー検査：

エコー検査は被ばくがなく、痛みもありません。リアルタイムで検査可能で、婦人科では第一選択の画像診断法です。子宮がん検診では分

からない子宮筋腫や卵巣腫瘍などの診断が可能です。



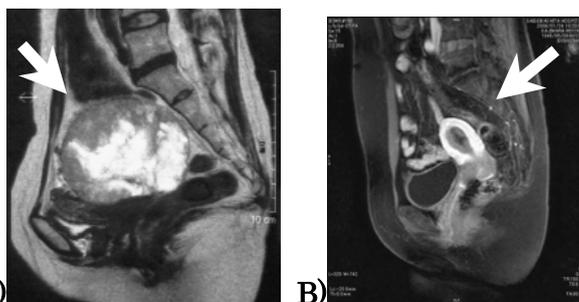
子宮筋腫は卵形の子宮筋層と同等のエコーに見えています。

CT検査：

検査時間が短く、一度に広範囲の画像が得られ、石灰化の描出に優れますが、X線被曝の問題があり、性成熟期女性では妊娠中のX線被曝を避けるため月経開始後、10日間の検査が勧められています（10日間ルール）。一般に組織のコントラストが不良でMRIのように子宮や卵巣の詳細な内部構造を観察することができません。

MRI検査：

MRIは骨盤の解剖（かいぼう）や機能・形態的变化を被ばくなどの侵襲なく良好に描出します。婦人科領域では腹部エコーで異常を指摘された場合の次の検査として、MRIが多く行われています。



A)卵巣がん、B)子宮がんの画像で、いずれも病変部が良好に描出されます。

最後に：

ここに挙げた画像診断法のほとんどが侵襲の少ない検査です。子宮がん検診で異常を指摘された方や不正出血の症状のある方はいち早い婦人科診察をお勧めします。また、貧血の症状で子宮筋腫が見つかることもあります。ご不明な点などがありましたら、主治医または放射線科外来までお尋ねください。